助産師学生のNICU実習での学びと助産師コア・コンピテンシーへの影響

白水 美保，新福 絵里香，永井 寛子，新小田 春美

要　旨

今回，NICU 実習を経験した助産師学生の学びを NICU 実習終了後に学生自身が自由記載したレポートにより検討した。研究方法は，過去 5 年間 23 名の助産師学生の NICU 実習終了レポートから，NICU 実習での学びを抽出しカテゴリー化した。分析および結果については，スーパーバイズを受けながら進め，分析内容の信憑性を高められるよう努めた。その結果，助産師学生の NICU 実習での学びは，6 つにカテゴリー化でき，【ハイリスク新生児の代表的な疾患の理解と特殊的なケアとの統合】【チーム医療が及ぼす効果とその重要性】【リアリティショックと恐怖感】【児と家族の未来へ向けての退院調整の在り方】【NICU における母親役割及び愛着形成を促す看護者の関わり方】【助産師のコア・コンピテンシーへの影響】を主に学んでいることが分かった。

NICU 実習の経験で学生は，これまで学内で学習してきた内容と臨地での状況を照らし合わせながら，ハイリスク新生児の治療および看護の特殊性を学べていた。また，小さな命が懸命に生きようとする姿や真摯にケアをする看護者の姿を通して，倫理的側面においても同時に深く考察でき，改めて周産期医療の中での助産師の役割と責務について考える機会となっていた。このことからも，NICU 実習での学生の学びは大きく，将来助産師として働くうえで重要な能力となる“助産師のコア・コンピテンシー”にも影響を与えた非常に意義ある実習であるといえる。

キーワード：NICU 実習，助産師学生，助産師，コア・コンピテンシー

Ⅰ　諸　　言

近年，日本における出生数は低迷している一方，ハイリスク妊娠およびハイリスク出産は増加し，それに伴いハイリスク新生児も増加している現状がある。厚生労働省の統計発表によるハイリスク新生児の中の低出生体重児の割合[1]　このような社会的背景もあり，助産師教育機関は，カリキュラムの中にハイリスク周産期の内容が学べる内容を多く取り入れ，社会的ニーズに即した教育の充実を図っている。

本学の助産師教育のカリキュラムの中にも，社会的ニーズに応えるべく周産期のハイリスク分野を学ぶ機会として，正常な分娩介助を主とした助産診断・技術実践（分娩介助実習）が終了した後に，新生児集中治療室（以下 NICU）の実習を取り入れている。ハイリスク新生児のケアは，妊娠期および分娩期と切り離して考えることはできず，周産期全般の中に連続性を持って存在するものである。このことからも，ハイリスク新生児を対象とする NICU 実習は，周産期全期間の学習にも繋がるといえる。

そこで今回，NICU 実習を経験した助産師学生の学びを NICU 実習終了後に学生自身が自由記載したレポートから検討をした。その結果，学生の意義ある学びが明らかになったためここに報告する。

鹿児島純心女子大学看護栄養学部看護学科

Ⅱ　研究方法

1. 研究期間
   平成 27 年 10 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日
2. 研究方法
   過去 5 年間の助産師学生の NICU 実習終了レポートから，NICU 実習での学びと思われる内容を簡潔かつ意味内容を損なわないコードで表現し，このコード化されたものを類似性に従ってサブカテゴリー化した。次に学びの構成要素を明確にするためにサブカテゴリーをさらに分析しカテゴリー化にした。分析および結果については，スーパーバイズを受けながら進め，分析内容の信憑性を高められるよう努めた。
3. 研究対象者　助産師学生　23 名

Ⅲ　倫理的配慮

研究の主旨と内容に同意が得られた者を研究協力者とし，収集されたデータは，研究者のもとで厳重に管理し個人が特定されないよう配慮することを説明した。

また，本研究においての協力は自由意思であり，非協力の意思を示した場合や，同意して協力していた

が途中で非協力の意思に気持ちが変わり協力中止になった場合においても一切不利益を被らない事を説明し，同意協力を得た。

Ⅳ　本学における助産師課程カリキュラム

助産師になるには，年一回実施される助産師国家試験に合格しなければならない。また，この助産師国家試験受験資格を得るためには，文部科学省の指定規定にもある 1 年以上の修業年限と専門科目 28 単位を修得することを条件としている（2021 現在）。

また，助産師国家資格だけでは就業することができず，看護師国家資格も取得しておくことが就業上の必須条件とされている。

現在，わが国の助産師教育課程は，学士課程の中や大学の専攻科，大学及び専門学校の別科，専門職大学院や大学院と様々な形態で存在している。本学は学士課程の中での助産師教育機関であり，助産師課程の学生は，通常の看護師教育の履修科目（必修・選択科目）に加え，助産師国家試験受験資格を得るため助産学を中心とした専門科目の単位も取得している。

助産師国家試験受験資格に必要な履修科目と単位数，本学における履修スケジュールについては以下の通りである（表 1 参照）。

表 1．学士課程（本学）助産師教育スケジュール

履修時期	科目名	単位
1 年次通年	看護教育必修・選択科目	複数単数
通年	看護教育必修・選択科目	複数単数
2 年次前期	母性保健概論	1
2 年次後期	母性看護学	2
2 年次末：助産師選択課程選考試験 ＊選考人数：従来の 6 名から H29 入学生より 4 名へ制限		
通年	看護教育必修・選択科目	複数単数
3 年次前期	母子の心理と社会	1
	地域母子保健	1
	助産学概論	1
3 年次後期	母性看護実践	2
3 年集中講義	母子の基礎科学	3
	母子の健康教育	1
通年	看護教育必修・選択科目	複数単数
4 年次前期	助産診断・技術学	2
	助産診断技術学演習 I	2
	助産診断技術学演習 II	2
	助産管理 I	1
4 年次通年	助産診断技術実践	8
	助産継続事例実践	1
	助産管理実践	1
4 年次後期	助産管理 II	1
	地域母子保健実践	1
4 年次末　助産師国家試験		

この 4 年次後期の『地域母子保健実践』という科目の中に“NICU 実習”は組み込まれている。

Ⅴ　『地域母子保健実践』の概要

1.『地域母子保健実践』の目的

1)「地域母子保健」「助産管理 I 」で学習した理論・技術をもとに，地域における母子保健施策とその実際を知り，現状における課題と今後の展望（育児支援・乳幼児虐待対策・少子化対策）について考えを深められ，今後の自己の助産観に繋げていくことを目的とする。

2)「地域母子保健」「助産診断・技術学演習 I 」で学んだ理論・技術をもとに，ハイリスク新生児への治療・看護の特殊性と現状及び課題に触れ，周産期医療の中の助産師の役割について考察を深めていくことを目的とする。

2.『地域母子保健実践』の目標

1）母子訪問を通して，地域における母子保健の在り方や，育児支援などについて考察することができる。

2）医療機関と地域保健の連携の実際を知り，社会資源の活用の意味・方法について学習・考察することができる。

3）ハイリスク新生児・低出生体重児の医療・看護の実際を知り，予防や医療・行政サービスの現状について学習・考察することができる。

4）ハイリスク新生児・低出生体重児の母親への役割習得における支援の状況や家族の支援の実際に触れ，そのような状況における助産師の役割について考察できる。

3. 実習内容

1）実習開始前オリエンテーション（半日）
　家庭訪問実習：地域連携継続支援（2 日）
　助産院実習：地域での子育て支援（1 日）
　“NICU 実習”：(1 日)
　実習終了後総まとめ（半日）

4. 修得時間と単位数　45 時間　1 単位

5. 評価

それぞれの実習が終了した時点で，学生に実習終了レポートを提出してもらい，本実習の目的目標と実習内容を照らし合わせて到達度を確認し総合的に評価する。

6.“NICU 実習”について

NICU 実習を行う時期は，約 7 週間に及ぶ助産診断・技術実践（分娩介助実習）を終え，一か月

ほど経過した時期であり，学生自らが経験した10例の分娩介助を振り返り，分娩について深く考えている時期でもある。

この助産診断・技術実践で経験する10例の分娩介助においては“リスクがない”“もしくはリスクが低い”妊婦産婦を選定し，受け持たせていただいている。そのため，学生は周産期のハイリスクを実際に経験することはほとんどない。

しかし，分娩進行は刻々と常に変化するため，分娩介助実習では，正常な分娩だけを担当するという保障はない。何らかの環境条件や因子により，分娩期の正常な経過は突如として異常へ逸脱することも容易にあり得るということも学生たちは10例の分娩介助実習を通して学んでいる。

助産師学生達は，NICU実習で初めてハイリスク新生児を目の当たりにし，想像でしかない周産期のハイリスクの世界を実感する。中にはリアリティショックを受けて，気分不良となり倒れて込んでしまう学生が毎年必ず一人は出現する実習でもある。

Ⅵ　結　　果

今回，過去5年間計23名の助産学生が自由記載したNICU実習終了レポートから，NICU実習での学びを構成する要素を意味内容が損なわれないよう留意しながら抽出しコード化した。このコードは25のサブカテゴリーに分類ができ，そこからさらに6つにカテゴリー化できた（表2）。

1．カテゴリー①について

【ハイリスク新生児の代表的な疾患の理解と特殊的なケアとの統合】

このカテゴリーは，ハイリスク新生児に代表的な疾患の深まりと専門的機器を用いての治療やハイリスク新生児の後遺症について，また，ハイリスク新生児の看護における専門的かつ特徴的なディベロップメンタルケア等の実際，事前の講義内容等で得ていた知識と実習で得た知識との統合による知識が深まりを示しており，4つのサブカテゴリーから構成された。

2．カテゴリー②について

【チーム医療が及ぼす効果とその重要性】

このカテゴリーは，3つのサブカテゴリーで構成され，高度であるハイリスク新生児の治療や看護の標準化を図るため，定期的にカンファレンス等を開催し医療チーム間で情報を共有していることや，このチーム医療がより安全性を高め，さらに質の高い治療および看護へ繋げている重要な体制であること，また，ハイリスク新生児の支援をどのような職種が担っているのか，実際のケースを臨床指導者から聞くことでイメージが掴め，医師や看護師だけではなく，理学療法士や作業療法士，臨床心理士やソーシャルワーカーなど多職種がチーム医療の中に存在していることをより理解できたことを示していた。

3．カテゴリー③について

【リアリティショックと恐怖感】

このカテゴリーは，実習前に想像していたNICU環境とハイリスク新生児と現状とのギャップと，ハイリスク新生児の外観（想像をはるかに超える小さな児の姿等）と病状から感じたリアリティショックと脆弱性，また高度かつ特殊な治療内容と専門性を必要とする看護を目の当たりにしての戸惑い，命に対する使命感と責任の重大さやその自己認識から恐怖心に繋がったことが示され，4つのサブカテゴリーから構成された。

4．カテゴリー④について

【児と家族の未来へ向けての家族再構築と退院調整の在り方】

このカテゴリーは，5つのサブカテゴリーから構成され，家族が希望する生活に向けての退院調整の重要性，NICUでの家族発達支援の在り方，在宅に向けてのソーシャルサポート体制づくりへの理解，また，障害のある児を養育する家族は，社会的にもハイリスク状況であるということが再認識された。できるだけ早期からの支援介入が必要であることがNICU実習を通して実感され，多職種の連携は入院中早期から行い，退院後自宅に戻ってからも介入は継続していく切れ目のない継続支援を示していた。

5．カテゴリー⑤について

【NICUにおける母親役割獲得および愛着形成を促す看護者の関わり方】

このカテゴリーは，母子分離状況であるからこそ医療者側から母親へ積極的に声掛けをし，母親役割を獲得できるよう促していることや，児が治療中であってもカンガルーケアやタッチング等可能な限り児に触れてもらい母児相互作用を高められるよう看護の中で工夫がなされていること，また，NICU独自の取り組みとして，日々の児の様子を記した“育児ノート”やNICUの中に入れない家族へ向けて“モニター”で面会してもらうなど様々な媒体を利用しながら愛着形成を促す関わり方の学びを示している。さらに，児がNICUに入院している母親の心理状態も臨床指導者からの話でさらに理解し，児が入院したのは自分のせいだと母親が自責の念に駆られないよう特に入院初期の段階では心理的支援に目が向けられており，5つのサブカテゴリーで構成された。

6. カテゴリー⑥
【助産師のコア・コンピテンシーへの影響】

このカテゴリーは，学生自身が小さな命を目の前にして，命の尊厳と治療などに関する決定権やハイリスク新生児の生存権や人権などについて深く考察できたこと，NICU 実習では，治療や救命，生存と死，そして後遺障害など考える機会が多々あり，自己の内面で様々な感情が沸き起こることがある。これらは，倫理的な事柄に直面していたということへの気付きと，さらに，分娩介助実習が終了し助産師の役割と責務についてより自覚できていた。

以上のことから，助産師学生の NICU 実習での学びは，6 つにカテゴリー化された【ハイリスク新生児の代表的な疾患の理解と特殊的なケアとの統合】【チーム医療が及ぼす効果とその重要性】【リアリティショックと恐怖感】【児と家族の未来へ向けての退院調整の在り方】【NICU における母親役割，愛着形成を促す看護者の関わり方】【助産師のコア・コンピテンシーへの影響】であることが分かった。

表 2. NICU 実習での学びを構成する要素

カテゴリー	サブカテゴリー
①ハイリスク新生児の代表的な疾患の理解と専門的かつ特殊的なケアとの統合	・ハイリスク新生児の代表的な疾患の理解と専門的治療の特殊性 ・ハイリスク新生児の後遺症の再認識 ・ハイリスク新生児の看護における専門的かつ特徴的なディベロップメンタルケア等の実際 ・講義内容等で得ていた知識と実習で得た知識との統合
②チーム医療が及ぼす効果とその重要性	・治療と看護の標準化のための医療チーム間の情報共有体制 ・専門性の高い分野における多職種連携の効果と重要性 ・NICU 内におけるチーム医療のイメージ化
③リアリティショックと恐怖感	・想像での児の状況と現状とのギャップ ・児のリアルな姿と病状から感じた脆弱性とリアリティショック ・高度かつ特殊な治療内容と専門性を必要とする看護への戸惑い ・命に対する使命感と責任の重大さやその自己認識からの恐怖心
④児と家族の未来へ向けての退院調整の在り方	・家族が希望する退院後に向けての調整の重要性 ・NICU での家族発達支援の在り方 ・在宅に向けてのソーシャルサポート体制づくり ・障害のある児を養育する家族は，社会的にもハイリスク状況であるということの理解 ・NICU での多職種の連携は入院中から行い，退院後自宅に戻ってからも支援していく継続支援の重要性
⑤ NICU における母親役割獲得および愛着形成を促す看護者の関わり方	・母親役割獲得へ向けての医療者側から母親への積極的関わり ・NICU 内での母児相互作用が高められる実際のケア ・愛着形成が促されるよう工夫された具体的ケア ・NICU に入院している母親の心理状態 ・入院初期の段階からの心理的支援の重要性
⑥助産師のコア・コンピテンシーへの影響	・ハイリスク新生児の命の尊厳と人権への思い ・治療や救命，そして現実となる後遺障害について ・倫理的な事柄についての気付き ・助産師の役割と責務について

Ⅶ 考　　察

今回，助産師学生がNICU実習で主に学んでいたことは，【ハイリスク新生児の代表的な疾患の理解と特殊的なケアとの統合】【チーム医療が及ぼす効果とその重要性】【リアリティショックと恐怖感】【児と家族の未来へ向けての退院調整の在り方】【NICUにおける母親役割および愛着形成を促す看護者の関わり方】【助産師のコア･コンピテンシーへの影響】であった。

助産師学生は，ハイリスク新生児の疾患については学内で既に学び知識を得て実習に臨んでいるが，実際のハイリスク新生児の状態と治療の特殊性，そして専門性の高いハイリスク新生児ケアの特徴でもあるディベロップメンタルケア等をNICU実習で実際に目の当たりし，自己の中での知識と視覚的な特殊的状況が統合され，これまで以上にハイリスク新生児への理解が深まったと思われる。しかし，ハイリスク新生児の特徴的ケアの一つであるカンガルーケア（母子早期接触）についてMooreらは，「赤ちゃん中心であるChild-centred Care」の原則，ケアの前後数時間を含めて安全面に最大の配慮を行うこと，そして家族にその希望があるかの確認を怠ってはならないとし，これらが軽視された場合，メリットよりデメリットが勝る可能性があり，母子接触の有効性は低下すると提言している[2)]。このことからも，学生には，例え良いケアとされることであっても，そのタイミングを見誤ると効果が最大限に発揮できないこともあるため，医療者視点でケアを先行させることがないよう大切な留意点も理解させておく必要があると考える。

また，実際のケースを通して臨床指導者の方から，支援の担い手は医師や看護師だけでなく，児の発育発達という重要な観点から理学療法士や作業療法士が介入していることや，母親の心理的支援や家族の発達および構築支援のため臨床心理士等が介入するなど専門性の高いチームで支援体制が整えられていることなどが話され，これまで以上にチーム医療の重要性と意識付けが出来たと思われる。

このチーム医療は，それぞれの専門性が発揮されることで質の高い効果的な支援に繋がるということもケースを通して学生は実習で再認識でき，NICUにおけるチーム医療のイメージ化に繋がったと思われる。

さらに，わが国は，児の障害や母子分離は社会的にもその母子と家族はハイリスク状況だと認識され，虐待等の早期発見のため妊娠期から夫婦に対する面接調査（ケンプ・アセスメント）[3)] 等が実施される支援づくりが初期の段階から積極的になされていることで，様々な良い成果も出している。このようなことも今回のNICU実習体験と合わせて専門職であるチームでの初期介入がより重要であることが深く認識できたのではないかと思われる。

また，実習終了レポートにはポジティブなことばかりではなく，リアリティショックと恐怖感を抱いたというネガティブな所感もあった。今回，学生が初めてのNICU実習で感じた気持ちは，おそらく母親が初めてNICU内に入った時の気持ちと類似していると考える。このネガティブな感情体験は，母児の初回面会時においてきっと活かされ母親の気持ちに寄り添えるケアに繋がると思われた。

しかし，まだ臨床経験の少ない学生の体験としてネガティブな感情体験には注意も必要である。ハイリスク新生児の姿と看護そのものが怖い存在として心に残ってしまいトラウマ化してしまう可能性もある。そうならないよう，NICU実習の引率教員ならびに臨床指導者は，学生のリアリティショックには十分注意し，学生が何を学んでいるかも大事だが，今何を感じているかという感情部分にもより重きを置いて注視していくことが教育上重要と考える。

また，児はこれまでNICU退院後においては，別の施設に転院という形が主だったが，小児訪問看護の増加に伴い，在宅という選択肢もここ数年拡がっているという現状に学生は驚きと喜びの感情を持った。子どもが家庭で過ごすということは本来家族の形として当たり前の形態であり望ましいことである。それを実現するには課題も多いが，家族の望む形への退院調整は，児と家族の未来への第一歩となる重要な支援であることを学生はこのNICU実習で実感でき，大きな学びに繋がったと思われる。

そして，本実習の目的にも挙げているハイリスク新生児・低出生体重児をもつ母親への役割習得支援については，カテゴリー⑤にも示されたように，学生は，母子分離状況下においての母児相互作用促進や母親役割獲得の重要性について深く考察できており，大学が期待する教育目標まで学びは到達できていると考える。NICU実習をとおして，正常新生児のケアもハイリスク新生児のケアも一つ一つ意味があり，奥が深いことを学生は感じていた。これは，正常な分娩介助実習を終えた後だからこそケアに対する感性もより備わり，ハイリスク児と異常児のそれぞれの支援の相違点や類似点をもしっかり考察できたと思われる。

また，母親は自己肯定感の低下や喪失感，自責の念に陥りやすいため，早めに丁寧な心理面での支援が必要であることや同時に家族発達の視点も必ず持ち合わせて支援することの重要性も理解できていた。しかし，健康障害のある児をもつ母親とその家族の

気持ちに共感し寄り添いながらケアを展開することは，経験未熟な学生や臨床経験の浅い看護師とってレベルの高いケアであり，かなり難しい看護技術と考える。これらに関しては，先ずは，家族の障害受容の過程[4]を参考にしながら対象へ寄り添おうとする気持ちを看護者は持つこと，そして，その寄り添いの中から目の前にいる対象の気持ちに近づき少しずつ理解していくことから始めればよいという教育的導きが必要と思われた。

最後に，カテゴリー⑥からNICU実習での学びが助産師に必要なコア・コンピテンシー（図１参照）に強く影響していることが分かった。この助産師のコア・コンピテンシーは，＜倫理的感応力＞・＜マタニティケア能力＞・＜ウィメンズヘルスケア能力＞・＜専門的自律的能力＞という４つの要素で構成され，どれも助産師に必要とされる能力である[5]。

その中の＜倫理的感応力＞は，＜ウィメンズヘルスケア能力＞・＜専門的自律的能力＞を働かせるときに必須の基礎的能力であり，＜ウィメンズヘルスケア能力＞・＜専門的自律的能力＞の高まりに応じて＜倫理的感応力＞はその拡がりや深まりを増すとされている。このように，＜倫理的感応力＞・＜マタニティケア能力＞・＜ウィメンズヘルスケア能力＞・＜専門的自律的能力＞は相互的で循環的な関係にある。

NICU実習は，リアリティの高い実習であることから助産師のコア・コンピテンシーを刺激する要素を多く含んでおり，特に学生たちは，コア・コンピテンシーの基礎的能力に位置する＜倫理的感応力＞を深め高めることが出来たと考える。その結果，安全なお産への意識が更に高まったのではないかと思われた。

また，助産師の理念とする“生命の尊重”“自然性の尊重”“智の尊重”は，助産師の４つのコア・コンピテンシーの中心に位置し，各能力を適切に方向づける役割を果たす要素である。このことからも，NICU実習は助産師のコア・コンピテンシーに影響を与える非常に意義のある実習であると思われた。助産師学生のNICU実習での体験が，助産師のコア・コンピテンシー獲得に繋がるよう，その中心に位置する学生の助産観が今後良い方向へ導けるよう，教育に携わる者は，学生の学びを丁寧に確認し，学生の抱く素直な気持ちや率直な疑問そして倫理的感情を受け止め，助産観を磨き導く非常に重要な役割があると思われた。

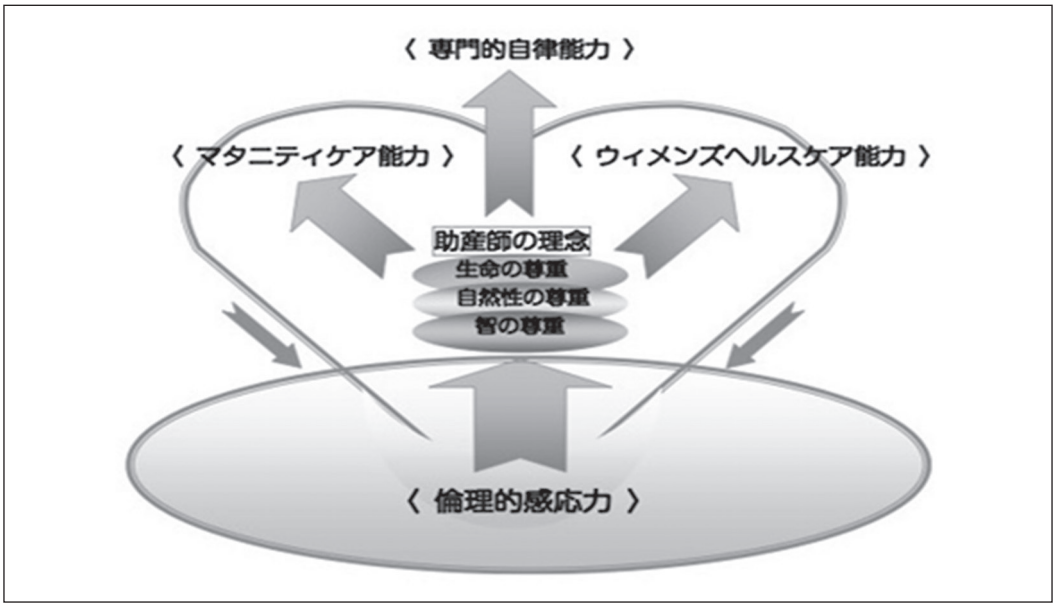

図１：助産師のコア・コンピテンシーのイメージ[6]

Ⅷ　結　　論

NICU実習の経験で学生は，これまで学内で学習してきた内容と臨地での状況を照らし合わせながら，ハイリスク新生児の治療および看護の特殊性を学べていた。また同時に，小さな命が懸命に生きようとする姿や真摯にケアをする看護者の姿を通して，倫理的側面においても同時に深く考察でき，改めて周産期医療の中での助産師の役割と責務について考える機会となっていた。

さらに，NICU実習での学生の学びは大きく，将来助産師として働くうえで重要かつ基本的助産実践に必要な能力の“助産師のコア・コンピテンシー”にも影響を与える非常に意義のある実習であることが明らかになった。

Ⅸ　本研究の限界と今後の課題

本研究は，学生の NICU 実習終了レポートにおいて表現された“学び”の内容を分析し明らかにした。しかし，あらゆる形で“学び”は人の深層部分にも潜在し，のちに人としての円熟や経験を積み重ねて表現される学びもある。よって，今後も継続してこれらの学びを確認していくとともに，将来助産師として働くうえで重要かつ基本的助産実践に必須となる“助産師のコア・コンピテンシー”の獲得を促す効果的な教育指導の在り方等についても探求していくことを今後の課題とする。

Ⅹ　謝　　辞

今回，本研究の主旨に賛同し，ご協力いただきました学生の皆様に深く感謝申し上げます。

文　　献

1）厚生労働省ホームページこども家庭局：成育医療等を巡る状況について「低出生体重児の総数と割合」（令和 2 年 2 月 13 日）．https://www.nhlw.go.jp, 2020（参照 2020 年 5 月 6 日）

2）Moore ER, Anderson GC, Bergman N.Early skin-to-skin contact for mothers and their healthy newborn infants. Cochrane Database of Systematic Reviews 2007,Issue 3.Art.No.:CD003519.

3）新井 里香，片岡 弥恵子（2010）：産褥早期における児童虐待の早期発見に向けたケンプ・アセンスメントの実用の可能性，日本助産学会誌 24(2)，215-226

4）Drotar, D.et al.:The adsptation ofparents to the berth of an infant with a congenital malformation, Ahypothetical model.Padiatrics, 56: 710-717, 1975

5）2019 改訂版 助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）活用ガイド . 公益社団法人日本看護協会. 13-54．2020.3

6）Butler et al.（2017）国際助産師連盟「基本的助産実践に必須なコンピテーション：最終報告書」，バンクーバー，UBC 助産過程，2017.4

Midwifery students' Learning from the NICU clinical practice and its impact on midwifery core competencies

Miho Shiramizu, Erika Shinpuku, Hiroko Nagai, Harumi Shinkoda

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,
Kagoshima Immaculate Heart University

Key words: NICU training, midwifery student, midwife, core competency

Abstract

For the purpose of examining the learning of midwifery students who have experienced practical training in the NICU, we analyzed the reports freely written by the students themselves after the practical training there. As a research method, we collected reports from 23 students after the training in the NICU in the past 5 years, and categorized the contents. The analysis and results were supervised, and efforts were made to improve the credibility of the analysis content. As a result, the students' "learning of practical training in the NICU" were able to be categorized into 6 categories as follows: [Understanding typical diseases of high-risk newborns and integration with special care] [Effects of team medical care and its importance] [Reality shock and fear] [Adjustment of discharge for the future of newborns and families] [How nurses are involved in the NICU to promote the role of mothers and the formation of attachments between mothers and children][Impact on midwifery core competencies] And it was found that they were mainly learning about these categories. Through the experience of the NICU training, students were able to learn the peculiarities of high-risk newborn treatment and nursing by integrating what they had learned on campus with the on-site situation. In addition, they were able to deeply consider the ethical aspects at the same time through how small lives try to live hard and the appearance of nurses who take care of them sincerely. It was an opportunity to reconsider the role and responsibilities of midwives in perinatal care. From the above, the learning of students in the NICU training is valuable, and it can be said that it is a very meaningful training for them because it will affect the midwifery core competencies that will be an important force in working as a midwife in the future.